# 異説御伽噺　「三枚の蛇の葉」

神田白兎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
異説御伽噺　「三枚の蛇の葉」

【Ｎコード】
Ｎ０７００Ｋ

【作者名】
神田白兎

【あらすじ】
「私は、私が死んだ時、共に墓に入ってくれる女性を娶ります」結婚嫌いの王子が、言い訳で口にした条件。その条件を飲む、優しい娘。浅ましい欲望と、死と、奇跡の葉に翻弄された、二人の死すら断ち切れない絆の物語。異説「三枚の蛇の葉」、開幕。

美しい王子は言いました。
「私は、私が死んだ時、共に墓に入ってくれる女性を娶ります」
その王子は、誰もが陶酔するほどの美貌を持っていました。美貌だけではなく、教養は高く、武芸に優れ、何より彼の国は豊かでした。
王子には、幼い頃から山のように縁談がありましたが、欲望丸出しの女など、王子にとってはうっとおしいだけ。王子は、結婚や女性に対して絶望していました。
年頃になって、縁談はさらに増えましたが、王子の結婚嫌いは悪化するばかり。家臣や父王が、どんな女なら満足するんだと尋ねれば、うっとおしそうな顔で言いました。
「死しても、私と離れない女。私と共に、墓に入ってくれる女です」
もちろんこれは、結婚したくない言い訳にすぎないつもりでしたが、効果は抜群でした。次期王妃の座を射止めようと、あの手この手で王子を誘惑しようとしていた貴族の娘や近国の姫達は、この条件を聞くとたちまち蒼い顔で、愛想笑いをして去って行きました。
王子は女が自分の元から離れて行くたびに、清々しました。
そんな、誰とも結婚する気などない王子は、出会いました。
没落寸前の、平民同然の貧しい貴族。どれほど他の貴族に、馬鹿にされても、誇りを失わず、気高く、そして優しい貴族の娘と。
結婚したがらない王子の為に開かれたパーティーで、群がる女たちから逃げ、庭園に避難した王子。その庭園に、先客として彼女はいました。
彼女は、彼が王子であるとは知らず、招かれた客の一人とでも思ったらしく、気安く話しかけてきたので、王子は驚きました。自惚

れではなく、自分が何者かも知らずに話しかけてくる女など、王子には初めてでした。
欲望が透けて見える、媚びた笑みではなく、純粋に楽しそうな笑顔も……
贅沢は慣れていないから、パーティーから逃げ出して、こんな所にいたと、照れ臭そうに語るのも、話し相手が来てくれて嬉しいと笑う顔も、全部、王子が知らないもの。
王子が自分の身分を明かせば、娘は驚きましたが、ただそれだけでした。言葉使いが丁寧になったくらいで、今まで通りでいいと王子が言えば、それはそれは嬉しそうに笑い、王子も何故かとても嬉しくなりました。
二人はただ、他愛もない話をして、その日は別れました。けれど王子は、どうしてもあの娘が忘れられず、彼は城の者の目を盗み、ちょくちょく彼女の元へ会いに通いました。
そうやって知った娘は、王子にとっては信じられない存在でした。ドレスをめったに着ない貴族なんて、王子は知りません。飢饉の時、領地の農民たちの為、私財を削って援助して、そのせいで没落寸前の貴族がいるなど、王子には信じられませんでした。
けどそれは、すべて真実でした。
その娘は、一番正しいがゆえに、愚かだと蔑まれる、哀れな娘。それでも、正しさを、優しさを失わない娘。王子が女に絶望した原因を何も、持ち合わせていない娘。王子にとって、この世で一番美しい娘でした。
王子は、彼女に恋をしました。

王子から、結婚したい相手ができたと聞いた時は、王も家臣も大層喜びましたが、その相手が貴族とは言え、たいして身分の高くない没落寸前の家の娘と知ったとたん、猛反対しました。
しかし戦略結婚を嫌った青臭い王子は、反対され、彼女を否定されるほどに意地になり、彼女と結婚できぬくらいなら、自分が身分

を捨てるとまで言いました。
そこまで言われると、表立って王子に異を唱えられる者は多くありません。だから、城の者はこともあろうか、さんざん撤回しろ、妥協しろと言っていた王子の花嫁の条件を、貴族の娘に知らせました。娘が、怖気づいて婚姻を断ることを、確信していました。
しかし娘は、そんな浅ましい考えを、いとも簡単に裏切りました。
「構いません。けど、私の方からも条件があります」
あっさり了承して、彼女は自分の条件を語りました。
「私が死んでも、決して私から離れないでください。死すらも、私達の絆を断ち切れないと、証明してください」
王子も娘と同じく、躊躇いなくその条件を飲みました。女を追い払う言い訳でしかなかった、誰もが恐れて逃げた条件すらも了承する彼女を娶れるのならば、自分も同じ条件を飲むことは、むしろ誇らしかったのでしょう。
互いにそこまで言われたら、もはや反対する余地も意味もありません。
王子と娘の婚姻は認められ、二人はめでたく夫婦となりました。

王子と娘は、とても仲睦まじく暮らしました。誰が見ても、満ち足りた、幸せそのもののような夫婦でしたが、運命は残酷なことに、まだ若い王子の命を、病魔で蝕みました。
医者という医者が王子を診ましたが、回復することはなく、医者たちはさじを投げましたが、娘は寝る間も惜しんで、愛する夫の看病を最後の最後まで続けました。
王子は、息を引き取る間際、何よりも大切な妻に言いました。
「約束は、守らなくていい。君はまだまだ生きて、幸せになってくれ」と。
けれど、王子の優しい願いは叶いませんでした。
娘の身分の低さを煩わしく思っていた城の者が、王子が死んですぐ、邪魔者を排除しようと、王子の遺言を無視して、娘にパンを一

個とワイン一ビンだけ与え、王子の棺と一緒に王家の地下墓所に閉じ込めました。
あまりにも理不尽な所業に、娘は抵抗しましたが、無駄でした。
娘は、死にたくなかったわけではありません。娘は王子が死んでしまうと同時に、心臓にナイフを突き立ててしまいたいくらい、王子を愛していました。
だからこそ、王子の遺言の為に、最期の願いの為にも、生きていたかったのです。
しかし、娘がこの地下から出る術はありません。娘は細々と、パンを齧り、ワインを飲み、王子の棺にすがって泣く以外、出来ることなどありませんでした。

貯えがなくなって、泣く気力すらなくなってきた頃、何処からともなく一匹の蛇がやってきて、その蛇はにょろにょろと王子の棺に近づいてきました。
王子の屍を齧りに来た蛇に、弱り切っているはずの娘は、ワインのビンをぶつけて退治しました。王子の願いが叶えられないのならせめて、自分が生きている限り、王子を守ろうとして。
ビンの欠片が砕けて刺さり、蛇は体が三つに裂かれて死にましたが、しばらくしたら何故かもう一匹やってきました。
もう一匹の蛇は、死んでいる蛇を見て、いったん戻りましたが、もう一度やってきた時には、口に三枚の葉っぱを咥えていました。蛇はまず、三つ切りにされた仲間の体をきちんとくっつけて、その傷口に一枚ずつ葉っぱを乗せました。
すると、三つに分かれたはずの体がくっついて、蛇は元通り生き返り、二匹は何事もなかったかのように、去って行きました。
これを見ていた娘は、弱った体で這い、残された葉っぱを拾います。一枚は茶色く枯れてしまっていましたが、後の二枚はまだ瑞々しい葉っぱで、そのうちの一枚を娘は、最後で最大の希望として王子の屍の上に置いてみました。

とたん、真っ白だった王子の顔に赤みがさし、氷のように冷たかった体にぬくもりが戻り、王子はぱちりと目を開けました。
生き返った王子が初めに見たのは、ボロボロに弱り切って、それでも幸せそうに笑う愛しい娘。
王子はほとんど何も理解できていないまま、衰弱しきった娘を抱きかかえ、地下の入り口で自分が生き返った事を大声で喚きました。
地下墓所の番兵は驚いて、慌てて二人を地下から出しました。
こうして二人は死地から再会を果たし、また、共に生きていくことを誓いました。
……けれど、神様はあまりにも非情でした。

不潔な地下墓所に、ろくに食べ物もなく長い間閉じ込められた娘の体は、すっかり弱り切って、重い病気にかかっていました。それだけなら、清潔な部屋で栄養をとり、安静にしていれば、時間がかかっても治ったかもしれませんが、……娘は、王子の子供を妊娠していました。
いくら安静にしても、子供に栄養を取られて娘は回復しません。出産は、母子共に危険だと医者に言われ、王子は堕胎を何度も説得して頼みましたが、、娘はいくら王子の頼みでも、それだけはきけないと、拒み続けました。
お腹が大きくなるにつれて、どんどん娘の命も削られていきましたが、娘は優しく笑って、心配する王子に、一枚残った葉を渡しました。
「この葉があれば、大丈夫。私は、蘇ることができます」
その言葉でやっと、王子は安心して、子供を産むことに賛成してくれました。
王子は失念していました。もしかしたら、わざと考えないようにしていたのかもしれません。
死ぬ可能性は、娘だけではなく、子供にもあること。奇跡の葉は、一枚しかないこと――

出産は、とてもひどい難産でした。三日三晩かけても子供は生まれず、娘も子供も両方死んでも何一つおかしくないくらい、弱っていました。

何もできない王子はただ、愛しい娘の手を握り続けました。

そして娘は、うつろな瞳で息も絶え絶えに、けれど王子が何よりも愛した笑顔で、語りました。

「……貴方は、私が笑うと嬉しそうに笑ってくれますね。私は、私の笑顔で笑ってくれる貴方が大好きです。残酷で浅ましいこの世の中で、優しさを失わず、私を一途に愛してくれた貴方を愛しています。

だからどうか、その優しさを、その笑顔を失くさないでくださいね。貴方の笑顔で幸せになれる者、貴方の優しさで笑う者……それは『私』です。貴方が優しさを失わない限り、私は死にません。貴方が笑い続ける限り、『そこ』に『私』はいます。――死すらも断ち切れない絆を、証明してくださいね」

娘の言葉が終わったとたん、握っていた手の力が抜けました。

王子は、娘からもらった最後の葉を、娘の上に乗せました。

その葉は、再び奇跡を起こし、枯れてしまいました。

王子が望んだ結果とは違う、娘ではなく、お腹の中の子が生き返り、産み落とされるという奇跡。

王子の愛しい人は、戻ってきてくれませんでした。

王子は、生きていながら死んだように日々を過ごしました。

自分も娘と同じく、地下墓所に閉じ込めろと叫びましたが、王子の願いは叶いませんでした。娘は無理矢理、閉じ込めて殺そうとしたくせに、王子がまた死んでは政治に支障をきたすからと言って、誰もが王子を生かしました。

王子は、すべてが憎くてたまりません。

愛しい娘を邪魔者扱いして、地下に閉じ込めた父王や家臣。娘が

死んですぐ、後妻狙いで群がる女。そして、娘が死んでしまう、一番の原因となった自分の子供……

王子は一度も子供を抱かず、顔すら見ませんでした。とても、自分の最愛を奪った存在を、愛せる自信などなく、むしろ自分の子を絞め殺してしまうかもしれないと、恐れていました。

そうやって王子は、この世すべてを憎み、娘との思い出に耽溺して、無意味に日々を過ごし、生きていました。

ある日、赤子の泣き声が城に響きました。

王子は耳を塞いで無視していましたが、ちょうどその時、子供の泣き声が聞こえる場所には誰もおらず、王子だけが子供の泣き声を聞いていました。

泣きやまない泣き声に、王子の堪忍袋の緒が切れました。苛立ちや怒りを超えた憎悪を抱き、彼は初めて、自分の子供と対面しました。

ベッドの上に寝かされ、激しく泣きわめく自分に似た子供。

それは、あまりにも小さく、か弱く、頼りない生き物でした。

決して一人では生きていけない、とても弱い生き物は、必死で泣いて、生きたい、生きたいと訴えていました。

そんな子供を見た瞬間、王子の心で荒れ狂っていた憎悪は、急にすとんと落ちて、何もなくなりました。

王子は、真っ白になった心のまま、泣きじゃくる子供をそっと、そっと、落とさないように、壊れてしまわないように、抱き上げました。

すると、先ほどまで泣いていたのが嘘のように泣きやみ、子供は笑いました。

どちらかと言うと、自分に似ているはずの子供の顔。けれどその笑顔は確かに……、愛しい娘のものでした。

「あなたの笑顔で幸せになれる者、あなたの優しさで笑う者……それは『私』です。あなたが優しさを失わない限り、私は死にません。

あなたが笑い続ける限り、『そこ』に『私』はいます」

「――あぁ。こういう意味だったんだな」

王子は、この時やっと理解しました。娘の、死に際の言葉。そして、娘が出した、結婚する時の条件を。

あれは、王子の「自分と共に墓に入る」とは違い、彼女が愛してくれた、彼女がくれた優しさを忘れずに、世界を嫌いにならないで、愛して生きてほしいという意味だったことに、王子はやっと気付けました。

王子は子供を抱きしめました。

王子と娘の、死すら断ち切れない絆の象徴を、強く、優しく――

## （後書き）

異説御伽噺シリーズ第六弾。マイナーグリム童話。これ、知ってる人いるの！？ってくらい、マイナー。
全体的に変えまくりました。改変じゃなくてこれ、別物だよってくらい。
まず、性別が違う。本当は、結婚嫌いなのは王女。そしてラストが全然違う。原作ラストは、後味の悪いバッドエンド。
「一緒に墓に入ってほしい」という条件と、蛇の葉しか使ってません。あとは全部、ほぼ神田の創作です。

原作丸無視な話ですが、最後まで読んでくれてありがとうございます。
よろしければ、感想もお願いします。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0700k/

異説御伽噺　「三枚の蛇の葉」

2010年10月8日13時54分発行